2004年春季名古屋大学附属図書館特別展

和歌（うた）の書物

新古今和歌集とその周辺

平成16年3月23日 q ▶ 4月21日 r

名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

目　　次

特別展開催にあたって …… 1

和歌と書物の世界へのいざない …… 2

１．特集・新古今和歌集

【１】新古今和歌集と王朝文化 …… 3
【２】新古今和歌集とその時代 …… 6
【３】版本のさまざま …… 10

２．歌まなびの世界 ― 師から弟子へ、受け継がれる<うた> ― …… 13

３．和歌の注釈とその変遷 ― 和歌はどのように読まれてきたのか ― …… 16

ギャラリートーク

講　　師：田中喜美春（元名古屋大学教授）
　　島田　修三（愛知淑徳大学教授・歌人）
　　大井田晴彦（名古屋大学文学研究科助教授）
日　　時：平成16年4月17日（土）13：00～15：30
会　　場：名古屋大学中央図書館5階多目的室

特別展開催にあたって

名古屋大学附属図書館では、平成13年2月の展示室設置以来、附属図書館所蔵資料の公開をかねて、春秋2回の展示会を継続して実施して参りました。今春の特別展では、「和歌（うた）の書物」と題し、人々の生の軌跡として書き留められた和歌が、どのように伝えられ、解釈されてきたのか、中世の和歌に関する書物を中心にとりあげ、古人との対話を試みています。

なお、本特別展は、このたび後藤重郎名古屋大学名誉教授から本学に対し、新古今和歌集関係の資料が数多く寄贈されたことを機に企画されたものです。会場では、これらの寄贈資料の紹介とともに、悉皆調査により全貌をあらわしつつある附属図書館所蔵資料（神宮皇学館文庫等）もあわせ展示公開します。

名古屋大学は、平成16年4月から国立大学法人名古屋大学として再出発します。その法人化を挟んだ１か月を開催期間としたのは、附属図書館が文化の継承地として、法人化後も変わることなく重要な使命と役割を果たしていく決意を示すとともに、新しく迎えた新入生に、文化の香りに接してもらうことを意図したものです。4月17日には、3名の講師を迎え中央図書館多目的室でギャラリートークも開催いたしますので、学内構成員だけでなく広く市民の方々にもお楽しみいただければと思います。

最後になりましたが、貴重な資料をご寄贈いただきました後藤名誉教授はもとより、今回の企画に特段のご協力をいただきました文学研究科の大井田助教授はじめ関係各位に厚くお礼を申しあげます。

平成16年3月

名古屋大学附属図書館長
附属図書館研究開発室長
教授　伊 藤 義 人

和歌（うた）と書物の世界へのいざない

春の訪れを喜び、散る花を惜しみ、かなわぬ恋を嘆き、親しい人の死を悼む、はるか万葉の時代から、人々はさまざまな思いを三十一文字に託してきました。時代とともに変遷を繰り返しつつも、決して途切れることなく、日本の文芸の主流を占めてきたのが和歌でした。人々は、和歌をかけがえのないものとして、大切に書き留め、歌集を編みました。こうした営みは、文化の伝統と、自身の生の軌跡を後世に伝えようとする情熱のなすところだったと言えましょう。多くの書物が残されたおかげで、現代の私たちは、いにしえの歌人たちと向き合い、その喜びや悲しみをともに分かち合うことができるのです。そして、これらの書物は、その装丁、料紙、また字配りなど、細やかな配慮がなされており、すぐれた芸術作品ともなっています。

このたび、本学名誉教授後藤重郎氏のご芳志により、多くの『新古今和歌集』関係の貴重な書籍が本学に寄贈されました。これを機に、今回は、「和歌の書物―新古今和歌集とその周辺―」と題し、本学所蔵のさまざまな歌集、歌論書を展示いたします。副題にもありますように、『新古今和歌集』をはじめとする中世の和歌に関する書物が中心となります。『新古今集』は、鎌倉初期に、後鳥羽院の勅命により編集された八番目の勅撰和歌集です。院をはじめ、西行・藤原俊成・定家・良経・宮内卿・式子内親王など当代歌人はもとより、前代の柿本人麻呂・紀貫之・和泉式部など多くの錚々たる歌人の珠玉の作が並んでいます。しばしば『万葉集』『古今集』と並び称せられますが、浪漫的で、優美繊細な新古今調を最も好み、愛唱する人も少なくないでしょう。

『新古今集』の成立したころは、戦乱に明け暮れていた時代でした。現代の世相に通ずるところがあるようにも思えます。不安と動揺の時代にあって、文化を大事に育み後世に伝えようとした人々がいました。彼らの営みに思いをはせることは、現代に生きる私たちにとって大きな指針となるのではないでしょうか。

平成16年3月

文学研究科助教授（日本文化学）
大 井 田 晴 彦

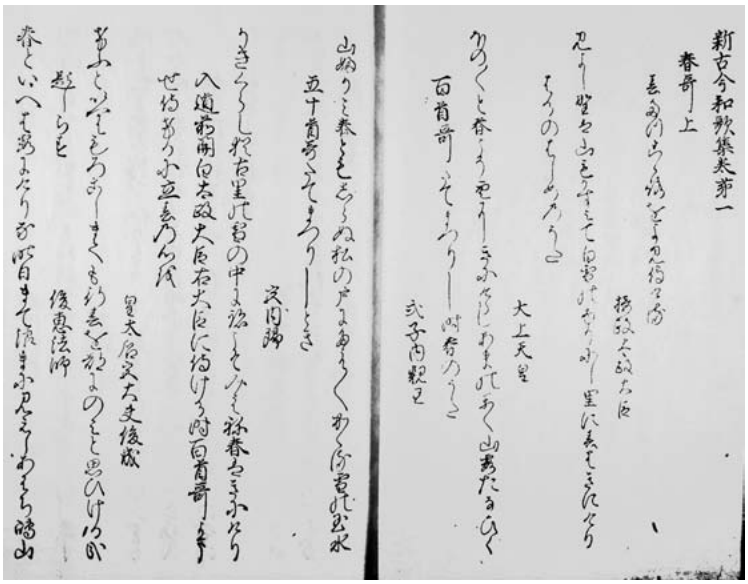
１．特集・新古今和歌集

【1】新古今和歌集と王朝文化

〈後鳥羽院と新古今和歌集〉

天皇の命により編集された、いわゆる勅撰和歌集は日本文学の主流を占めている。平安時代、延喜五年（905）奏覧の『古今和歌集』にはじまり、室町時代、永享十年（1438）の『新続古今和歌集』まで二十一の勅撰集が編纂された。天皇や上皇は、治世の記念として有力歌人に撰進を命じた。撰者に選ばれたり、自作が入集したりすることは、多くの逸話の語るように、大きな名誉であった。部立や歌の配列は緊密に構成されており、撰者の苦心のほどが知られる。

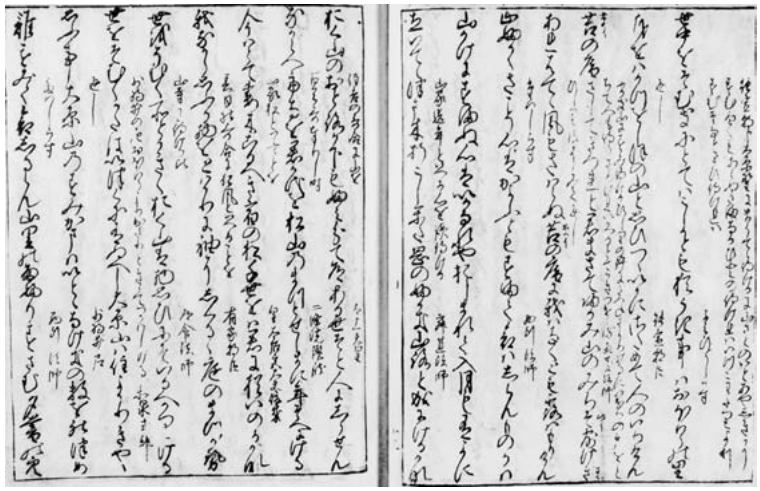
『新古今和歌集』は、第八番目の勅撰和歌集である。建仁元年（1201）、和歌所を設置した後鳥羽院は、源通具・藤原有家・定家・家隆・雅経・寂蓮に撰集を下命、さらに院が精選し、元久二年（1205）に竟宴が行われた。以後も切り継ぎ（歌の出し入れ）が行われ、承元四年（1210）頃にほぼ完成。『新古今』という命名、また『古今集』奏覧からちょうど三百年後の竟宴など、『古今集』を強く意識しており、醍醐天皇の治世を範として仰ぐ後鳥羽院の理想がうかがえる。



① 新古今和歌集

刊本　大本４巻２冊（後藤文庫70）

春上の巻頭。藤原良経（摂政太政大臣）・後鳥羽院（太上天皇）・式子内親王・宮内卿・藤原俊成ら当代の一流歌人の作が並ぶ。院の「ほのぼのと春こそ空にきにけらしあまのかぐ山霞たなびく」は「久方の天の香具山この夕べ霞たなびく春立つらしも」（万葉集・巻十・1812・人麻呂歌集）の本歌取。神聖な香具山を歌った舒明・持統天皇の存在も意識されており、帝王の理想を歌ったものと解される。古来、初句が第三句と第五句のどちらにかかるのかが問題とされてきた。古活字本。



② 新古今和歌集

刊本　大本４巻４冊（後藤文庫25）

「おく山のおどろが下もふみ分て道ある世ぞと人にしらせん」（雑中・1635・後鳥羽院、以下、歌番号は『新編国歌大観』による）。「おどろ」は、いばらのこと。上三句に、奥山に住む賢人を探し出して、あるいは北条氏を征伐して、などの寓意を見る説がある。帝王としての強い意志を示した歌で、『増鏡』巻一の名の由来ともなった。刊記「承応三歳（1654）仲夏吉辰」。（五）類本。

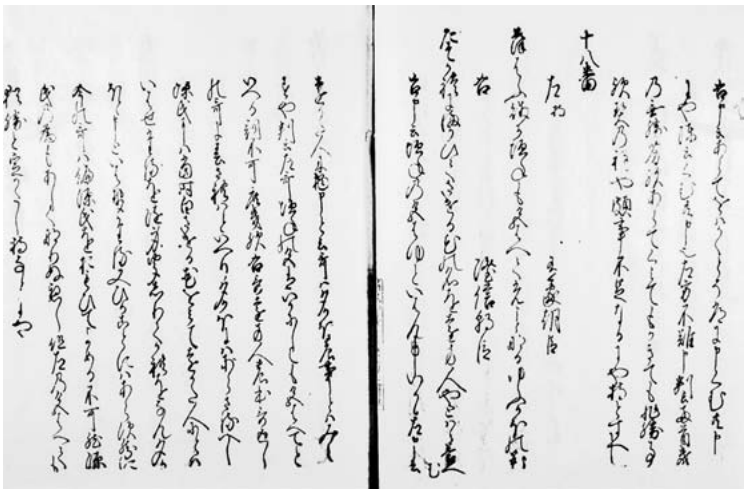
〈王朝文化の受容と変容〉

『新古今集』の基調のひとつに、古典主義があげられる。戦乱の世にあって、人々は華やかな王朝時代の文化に憧憬を抱き、その世界に転移しようとした。この時代の和歌を特徴づける本歌取も、かかる意識に基づく。本歌取とは、古歌や物語などの情趣を取り込み、新たな叙情を生み出していく技法で、とりわけ『万葉集』『古今集』『伊勢物語』『源氏物語』『白氏文集』などが重視された。「源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり」という藤原俊成のことば（『六百番歌合』冬）は有名である。

③ 新古今和歌集

刊本　大本４巻４冊（後藤文庫５）

春上。「梅花匂ひをうつす袖のうへに軒もる月の影ぞあらそふ」（44・定家）から「梅花あかぬ色かもむかしにておなじかたみの春のよの月」（47・俊成女）まで、「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」（『伊勢物語』第四段）による。二つの「や」は疑問説と反語説があるが「心余りて言葉足らず」（『古今和歌集』仮名序）と評される、いかにも業平らしい歌であり、新古今歌人たちに愛好された。近世前期、梅村弥右衛門刊。（五）類本。



④ 六百番歌合

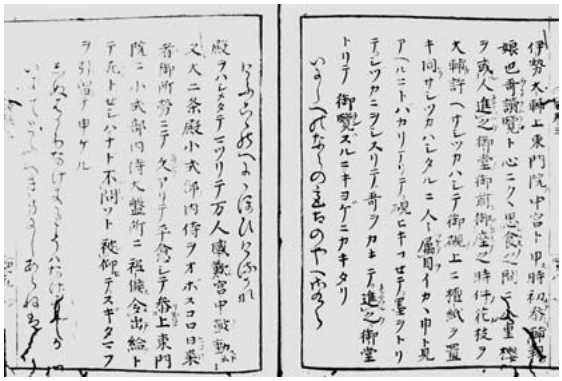
刊本　大本10巻10冊のうち３冊欠

（神宮皇学館文庫911.18-R）

建久四年（1193）ごろ、良経の主催により、定家ら御子左家の新風歌人と顕昭ら保守派の六条家歌人が参加した大規模な歌合。俊成の判は一種の歌論となっている。不服の顕昭は『六百番陳状』で論駁した。この歌合から34首が『新古今集』に入集。写真は夏下・十八番。『源氏物語』夕顔巻の、源氏と夕顔の出逢いの場面を踏まえる。承応元年（1652）孟冬、村上平楽寺（二条通玉や町）刊。

〈詠作と理論〉

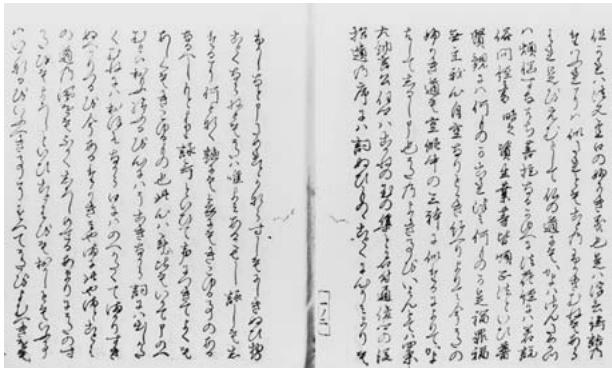
『新古今集』成立前後から、和歌の本質や修辞など、さまざまな問題について研究する、歌学・歌論が盛んとなる。歌学は実際の詠作と一続きのものとしてあり、歌人は同時に歌学者であった。歌人たちは、理論に磨きをかけ、また範とすべき『古今集』などの古典の研究に力を注いだ。これが『新古今集』の表現をより豊かなものとした。



⑤ 袋草紙

刊本　大本４巻４冊　（神宮皇学館文庫911.107-H）

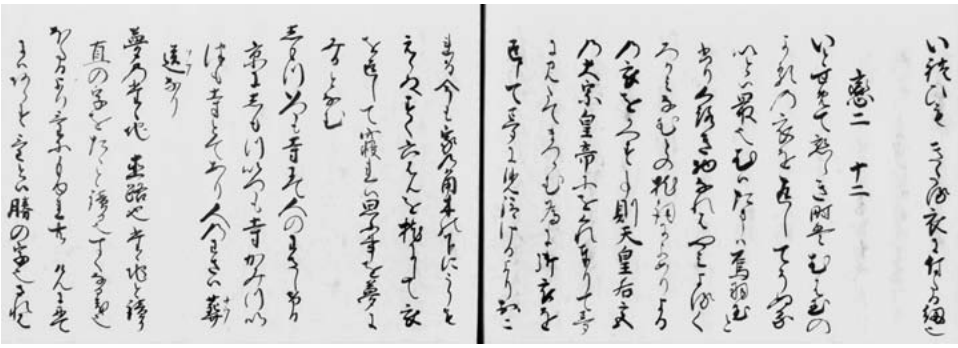
藤原清輔（顕輔の子）の歌論書。平治二年（1159）二条天皇に奏覧された。歌会の作法、勅撰集の編集、歌人の逸話、歌合の故実など、百科全書的内容をもつ。豊富な資料に基づく実証的な六条家の学風をよく伝える。写真は、中宮彰子に出仕したての伊勢大輔が、機知に富む歌で人々を感服させた逸話。貞享二年（1685）仲春刊。



⑥ 古来風体抄

刊本　大本５巻５冊（神宮皇学館文庫911.104-H）

俊成の歌論書。式子内親王に献上。建久八年（1197）ごろ成立の初撰本と、建仁元年（1201）成立の再撰本とがあり、本書は後者の系統。和歌の歴史的変遷を多くの例歌をあげて論じ、歌の道の奥深さを『摩訶止観』になぞらえて説く。「歌は唯よみあげもし、詠じもしたるに、何となく艶にも哀にも聞こゆる事のあるなるべし」の有名な記述が見える。元禄三年（1690）、洛下小崎七左衛門・田中市左衛門刊。



⑦ 古今密勘注

写本　中本横本１冊（神宮皇学館文庫911.1351-N）

『古今和歌集』の初学者向け注釈書。伝肖柏作。仮名序および和歌273首の要語に簡略な注を施す。写真は「いとせめて恋しき時はむば玉のよるの衣を返してぞぬる」（古今集・恋二・554・小野小町）についての注。書写識語「寛永拾（1633）癸酉暦弥生日写之／祥景」。

【2】新古今和歌集とその時代 ― 紅旗征戎吾が事に非ず ―

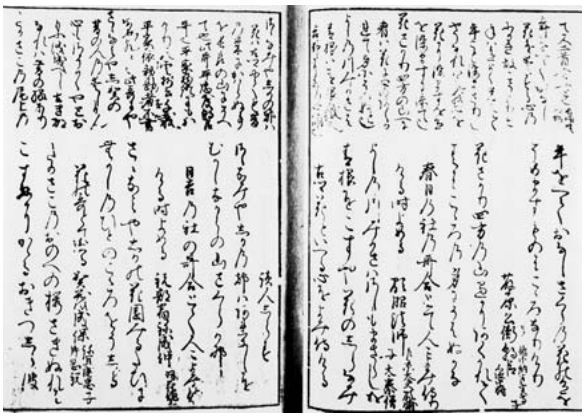
〈戦乱の時代のさなかに〉

『新古今集』の成立前夜は、源平の争乱の時代にあたるが、和歌の伝統は絶えることなく、盛んであった。武士、とりわけ平家には和歌をたしなんだ者も多い。『平家物語』には、忠盛の当意即妙の歌が鳥羽院の意にかない『金葉集』に入れられた話、忠度が都落ちの際に、俊成に歌を託し、『千載集』に詠み人知らずとして入集した話などが見える。

① 詞花和歌集

写本　大本10巻１冊（神宮皇学館文庫911.1356-Si）

第六勅撰集。藤原顕輔撰。崇徳院の院宣により、仁平元年（1151）奏覧。和歌を愛好した院は、「久安百首」を主催した。この「瀬をはやみ」の歌（恋上・229）もその折のもので、『百人一首』にも選ばれる。暗い出生の秘密をもつ院は、父鳥羽院と不仲であった。保元元年（1156）の乱で後白河天皇に敗れ、配流先の讃岐で崩御。室町後期頃写。



② 千載和歌集

刊本　中本20巻１冊（後藤文庫２）

第七勅撰集。藤原俊成撰。後白河法王の院宣により、文治四年（1188）実質的に奏覧。「さざなみやしがの都はあれにしをむかしながらの山ざくらかな」（春上・66）。朝敵とされた平家歌人の作は、忠度のほかに経正（２首）・行盛・経盛（各１首）が「詠み人知らず」として入集。近世前期刊二十一代集の一。「聖護院蔵書記」の印記あり。

〈新古今時代の開幕〉

建久九年（1198）、十九歳の若さで譲位した後鳥羽院は、近臣らの影響もあって和歌に関心を深め、歌会や歌合を頻繁に主催した。なかでも建仁元年（1201）ごろの『千五百番歌合』は空前の規模を誇り、『新古今集』に90首入集、最多の撰集資料となっている。

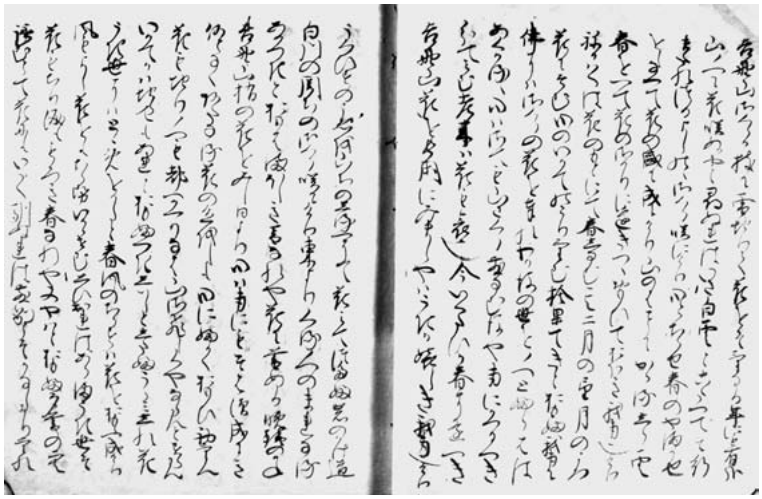
③ 千五百番歌合

刊本　大本20巻10冊　（岡谷文庫911.14-Se）

恋一・一一八八番。慈円（前権僧正）は九条兼実の弟、良経は甥。四度にわたり天台座主。『新古今集』92首入集は西行に次ぐ。俊成卿女は、祖父俊成の養女。「下燃えに思ひ消えなむ煙だに跡なき雲のはてぞ悲しき」が院の命で『新古今集』恋二の巻頭歌（1081）とされ、「下燃えの少将」の名を得た。左右それぞれ「君や来む我や行かむのいさよひに槙の板戸もささず寝にけり」（古今集・恋四・690・詠人知らず）、『源氏物語』の巻名「夢の浮橋」を踏まえた、名勝負である。近世前期、中御門通弱檜木町吉田四郎右衛門刊。

〈新古今の歌人たち―西行〉

西行は俗名佐藤義清、鳥羽院の北面の武士であった。二十三歳で妻子を捨て出家、草庵や旅にあって桜と月を愛でた歌人として知られる。『新古今集』には最多の94首が入集、後鳥羽院に「生得の歌人」と評された。文治六年（1190）二月十六日、「願はくは花の下にて春死なむその如月の望月のころ」（『山家集』）の望み通りの往生は、多くの歌人を感嘆させた。その数奇人としての生き方は多くの伝承をも生み出した。

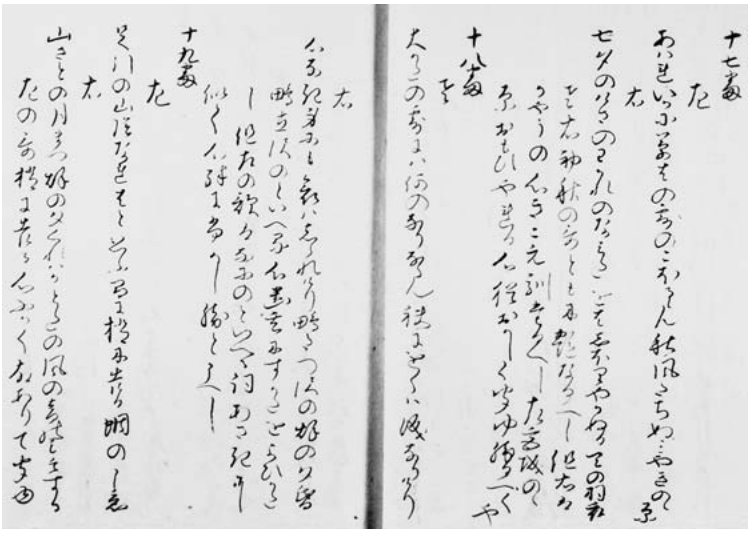


④ 六家抄

写本　大本１冊

（神宮皇学館文庫911.147-N）

永正二年（1505）ころ、肖柏が『古今集』の六歌仙に対する新古今時代の新六歌仙として各家集（良経『秋篠月清集』・俊成『長秋詠藻』・西行『山家集』・慈円『拾玉集』・定家『拾遺愚草』・家隆『壬二集』）から秀歌を選んだもの。写真は春部・山家抄。左端「詠むとて」の歌は『新古今集』春下に入集（126）。近世前期写。



⑤ 御裳濯河・宮河歌合

写本　半紙本１冊

（神宮皇学館文庫911.18-Sa）

晩年の西行が、自作144首を36番72首の二部の歌合とし、俊成と定家にそれぞれ判を依頼したもの。『御裳濯河』は伊勢神宮の内宮へ、『宮河』は外宮に奉納された。『千載集』を見に上京した西行は、この「心なき」の歌（御裳濯河・十八番右）がもれたと聞き、そんな集は見ても仕方ない、と言って引き返したという（『今物語』・『井蛙抄』など）。書写識語「右壱冊三谷氏所持之本借之書写畢／宝暦七丁丑年（1757）冬十月中旬／藤原有親（印）」。

〈新古今の歌人たち―鴨長明〉

『新古今集』撰集のため設置された和歌所の寄人の一人に選ばれたのが、『方丈記』の著者、鴨長明である。下鴨神社の禰宜職をめぐる競争に敗れた長明は失踪、まもなく出家した。『新古今集』には10首入集。歌論『無名抄』は、多くの歌人の興味深い逸話を記している。

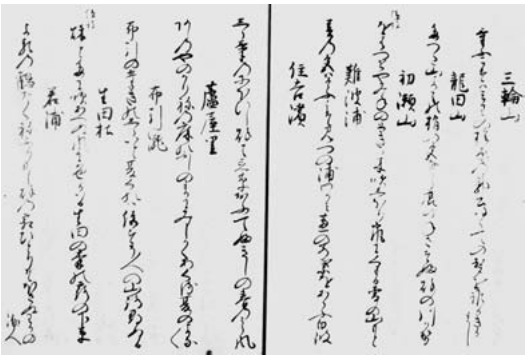
⑥ 無名抄

刊本　大本２巻２冊　（神宮皇学館文庫911.104-Ka）

長明が『新古今集』恋歌の秀逸とする三首。「かくてさは」の歌は、現存本には見えず、数次にわたる編集作業の間に削除されたものであろう。「野べの露は」は慈円（恋五・1338）、「かへるさの」は定家（恋三・1206）の歌。刊記「婦屋仁兵衛」。寛文頃刊。

<新古今の歌人たち―藤原定家>

定家は、父俊成の指導の下、早くから歌作に励んだ。九条家に仕え、良経の歌壇で活躍。その斬新な歌風は「新儀非拠達磨歌」（わけのわからない歌）との批判もあったが、後鳥羽院に認められ、歌壇の主流となる。『新古今集』の撰者の一人で、46首入集。続く第九勅撰集『新勅撰集』（嘉禎元年・1235）は、単独撰。『小倉百人一首』も定家の撰とみられる。家集『拾遺愚草』、歌論『近代秀歌』『詠歌大概』ほか著作は多く、また『古今集』『伊勢物語』『源氏物語』などの古典の書写・校訂もかなりの数にのぼる。日記『明月記』は、定家の複雑な人物像と当時の世情を伝える一級資料であり、争乱に公家は関知しないとする「紅旗征戎吾が事に非ず」の言葉はよく知られる。



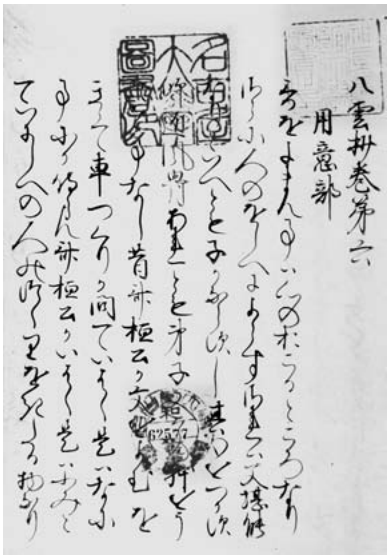
⑦ 拾遺愚草

写本　大本４巻３冊（神宮皇学館文庫911.148-H）

定家の自撰家集。建保四年（1216）に初撰本が成立、後に増補。書名は当時の官職であった侍従（唐名拾遺）による。上巻は百首歌、中巻はその他の定数歌、下巻は四季・恋などの部類歌。これら正編三巻にもれた定数歌を員外におさめ、中巻と員外を合わせて一冊とする。中巻奥書「応永十七年（1410）卯月一日於称名寺草庵書之畢　隠士正清」とあり、正徹（正清）の書写と知られる。草稿本系統。

〈新古今時代の終焉〉

王朝政治の復興をめざす後鳥羽院と、鎌倉幕府の緊張は次第に高まっていく。北条氏の傀儡にすぎぬ将軍源実朝は、歌道に親しみ、定家を師と仰いだ。実朝の死後、朝幕関係は一段と悪化、承久三年（1221）院は幕府討伐の兵を起こす。朝廷側は大敗、後鳥羽院は隠岐へ、土御門院・順徳院はそれぞれ土佐・佐渡へ配流となる未曾有の事件であった。不遇にあっても後鳥羽院の和歌への情熱は衰えず、『新古今集』を精撰、約四百首を削除した。いわゆる隠岐本である。



⑧ 八雲御抄（八雲抄）

写本　半紙本６巻７冊（神宮皇学館文庫911.104-Z）

順徳院著。内容は、六義・歌体の説明、歌合や歌会の作法、歌語・歌枕の解説、歌論など多岐にわたる。順徳院は父後鳥羽院と定家から和歌を学び、歌合・歌会を盛んに催した。漢詩文・琵琶にもすぐれ、故実書『禁秘抄』の著もある。承久の乱以前にほぼ完成した草稿本と、乱後定家に送られた精選本があり、本書は後者の系統。近世初期写。

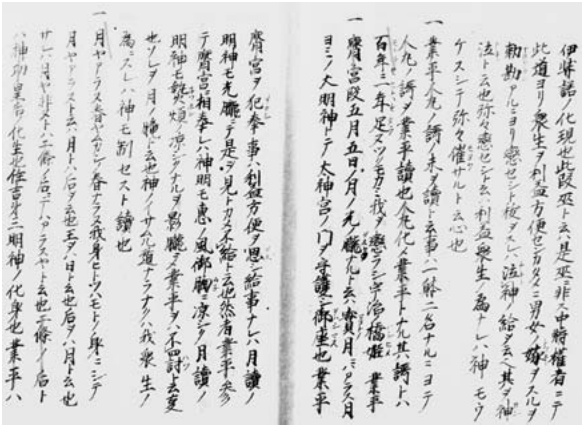
<御子左家の分裂>

後鳥羽院とは対照的に、定家は恵まれた晩年を送った。権勢家西園寺家との縁で中納言正二位まで昇進、単独で『新勅撰集』を編み、子の為家も歌人として大成した。為家の死後、その子為氏・為教・為相は、二条・京極・冷泉の三家に分かれて対立し、自家の説を権威づけるため、定家や高名な歌人に仮託した偽書をも生み出した。

⑨ いざよひ物語

写本　枡形本１帖（神宮皇学館文庫911.14-H）

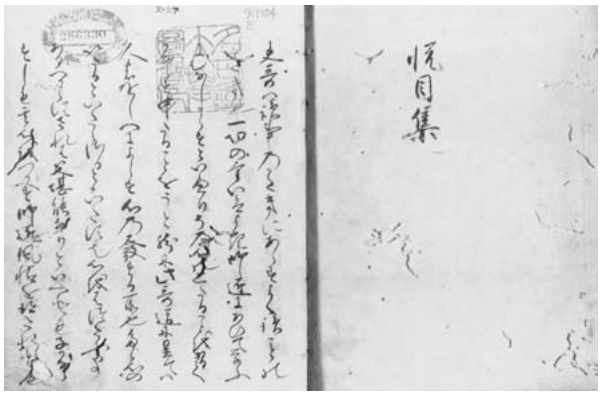
46題123首の恋歌を収める類題歌集。題名は序文の「やよひの十六のよひ」にちなむ。「寄月恋」「寄雲恋」の末尾に「右七十一首　参議為家」「八首之詠為家卿」とあるが、実際は『風雅集』から『新続古今集』までの諸歌人の作を収める。為家の名による権威づけか。書名も、阿仏尼（為家の後妻）の『十六夜日記』を連想させる。近世前期写。



⑩ 玉伝深秘

写本　大本１冊（神宮皇学館文庫911.107-G）

中世の『古今集』『伊勢物語』注釈書。為顕（為家の子）流の秘伝を集大成した書。写真は「斎宮の段の事」「月哉不有事」。書写識語「于時正徳三癸巳年（1713）春書写畢　狛久忠」。



⑪ 悦目抄（悦目集）

写本　大本１冊（神宮皇学館文庫911.104-E）

二条為世流によって、平安後期の歌人藤原基俊（俊成の師）に仮託された歌論。『八雲御抄』（⑧参照）など先行の歌論の引用が多い。書写識語「天文三甲午年（1534）沽洗十三日上章執徐　春好軒於鳩原被写畢／右筆宋竹入道」。

【3】版本のさまざま

〈版本の伝流と系統〉

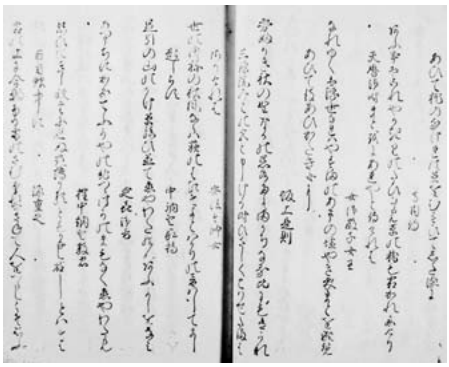
書物の文化を考える上で、近世は大きな転換期である。印刷技術の進歩によって、さまざまな書物が広く流通することになった。浮世草子や読本の新作はもとより、多くの古典が出版された。『新古今集』ともなると、江戸時代の版本は30余種にも及ぶという。このたび、その多くが本学の所蔵となった。なお、以下の分類は後藤重郎氏「新古今和歌集板本考」（『名古屋大学文学部二十周年記念論集』1968）による。

（1）古活字本

① 二冊本（乙）

刊本　大本4巻2冊（後藤文庫70）

歌数1980首。奥書・刊記なし。ほかに古活字本には、定家書写の仁和寺宮本系本文を伝える歌数1970首のものがある。



（2） 整板本

歌数によって大きく二系統六類に分類できる。

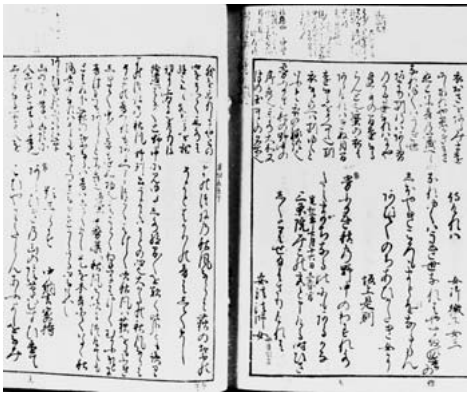
イ　八代集抄本系（文明八年の肖柏の校訂を伝えるもの）

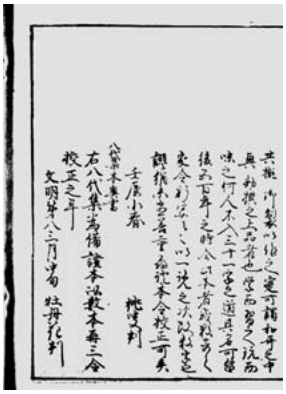
（二）類（1983首）　→　（一）類（1984首）

② 八代集抄本

刊本　半紙本50冊（後藤文庫29）

（二）類本。元奥書「右八代集為備証本以数本再三令校正之畢／文明第八三月中旬　牡丹花判」。天和二年（1682）中夏浪花書舗柏原屋佐兵衛等五軒刊。





③ 東京書肆白楽圃板

刊本　特小本２巻１冊（後藤文庫32）

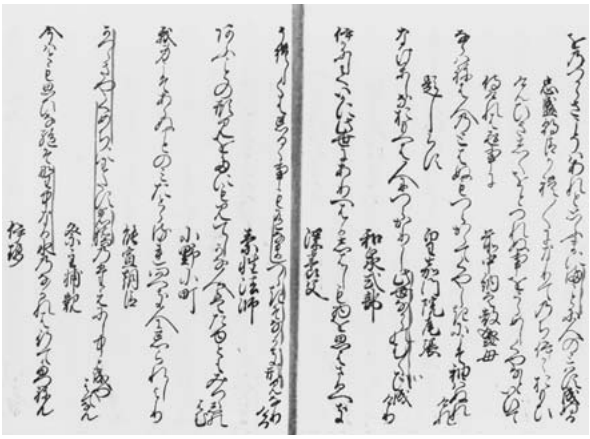
（一）類本。「世のつねの秋風ならば荻の葉にそよとばかりの音はしてまし」（恋三・1212・安法法師女）が重複。明治二十四年（1891）江島伊兵衛（東京日本橋区通四丁目十番地）刊。

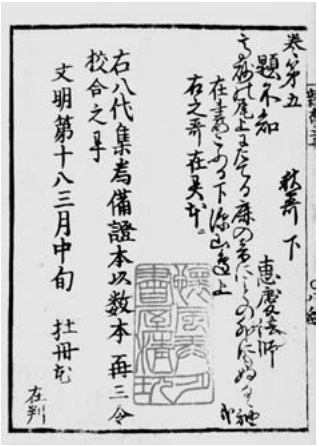
ロ　正保四年吉田四郎右衛門尉板系（文明十八年の肖柏の校訂を伝えるもの）
（三）類（1981首）　→　（四）類（1980首）　→　（五）類（1977首）　→　（六）類（1976首）

④ 明暦元年（1655）八尾勘兵衛板

刊本　大本４巻４冊（後藤文庫８）

（三）類本。「うれしくは忘るる事も有なましつらきぞながき形見なりける」（恋五・1403・清原深養父）に注意。なお、この系統には「右八代集為備証本以数本再三令校合之畢／文明第十八三月中旬　牡丹花在判」という元奥書のある本がある。

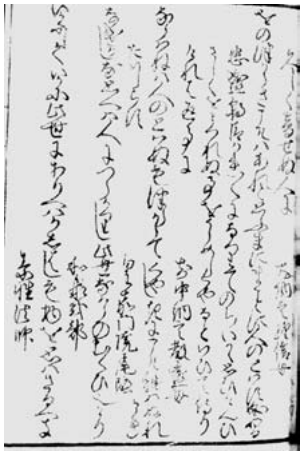


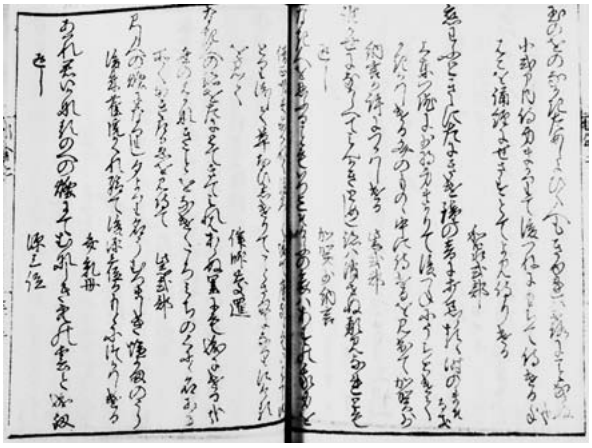


⑤ 延宝二年（1674)刻文化元年（1804）補刻植村藤右衛門板刊

刊本　小本２巻２冊（後藤文庫17）

（四）類本。1403の歌が脱落している（写真左）。「誰か世に」（817）～「なき人の」（819）の歌に注意（写真右）。

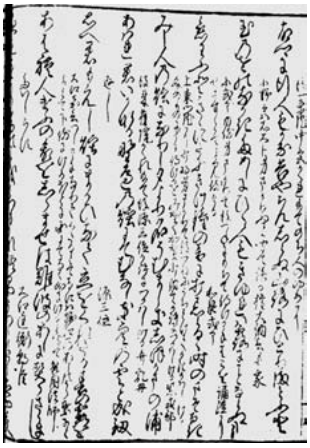




⑥ 承応三年（1654）
中野太郎左衛門板

刊本　大本４巻１冊（後藤文庫６）

（五）類本。さらに817～819の三首が脱落。紫式部の歌が近接して二首あることから生じた誤脱と見られる。



⑦ 承応三年
松会市郎兵衛板

刊本　大本４巻１冊（後藤文庫７）

（五）類本。「たのもしな野の宮人のうふる花しぐるる月にあへずなるとも」（雑上・1576・源順）の歌に注意。

⑧ 正徳三年（1713）
柏原四郎兵衛板

刊本　大本４巻４冊（後藤文庫41）

（六）類本。1576が脱落。

（参考①）

元禄二年（1689）天王講会板・元禄九年（1696）
文拡堂板（後藤文庫48・22）

元禄九年板は、元禄二年板の復刻に又丁で挿絵が入っている。（三）類本系統。

（参考②）

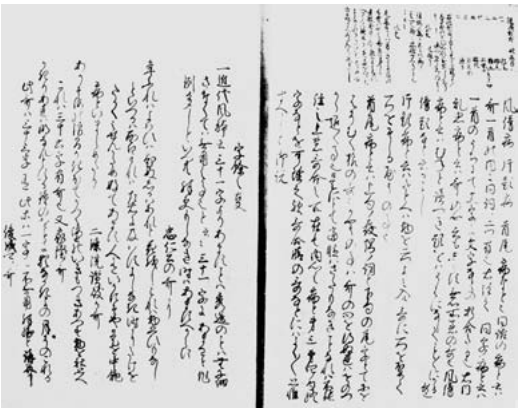
文拡堂新板（後藤文庫47）

元禄九年板の後印刊年記削除本。歌人香川景樹の書き入れが見られる。「桂園香川章」の印記は、これまで紹介されておらず貴重である。『新古今集』について著作のない景樹だが、歌論にはしばしば批判が見える。

２．歌まなびの世界 ― 師から弟子へ、受け継がれる<うた> ―

〈近世和歌の始発〉

近世の和歌は、中世の古今伝授（和歌の秘説を弟子に相伝すること）の継承から始まる。関が原の合戦の起こった慶長五年（1600）、細川幽斎は、八条宮智仁親王への古今伝授を開始。相伝を終えた親王は甥の後水尾天皇に伝え、以後御所を中心に伝授が行われた。中院通勝・烏丸光広・木下長嘯子・松永貞徳などいずれも幽斎の門下であり、その存在の大きさが理解できよう。



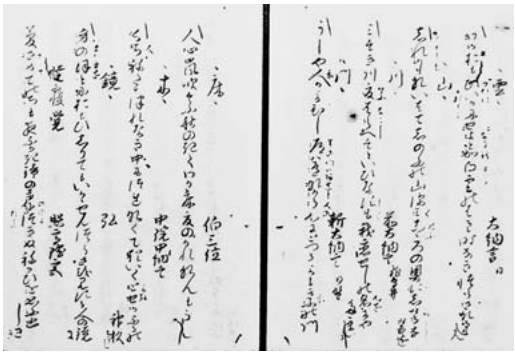
① 和歌続口伝

写本　大本１冊（神宮皇学館文庫911.107-W）

細川幽斎の口述を門人佐方宗佐が筆記したもの。「題之歌之事」～「述懐哀傷之歌之事」など全四十条。写真は「歌之病之事」「字余之事」。近世中期写。

〈後水尾歌壇〉

後水尾天皇は後陽成天皇第三皇子。慶長十六年（1611）、十六歳で即位。「禁中並公家諸法度」、紫衣事件など、圧力を加える幕府への不満から、寛永六年（1629）突然譲位。以後、約半世紀にわたって宮廷歌壇の中心として君臨、後西天皇、烏丸資慶、中院通茂ら八人に古今伝授を行うなど、廷臣の指導に努めた。立花にも造詣深く、修学院離宮の造営でも知られる。



② 万治御点

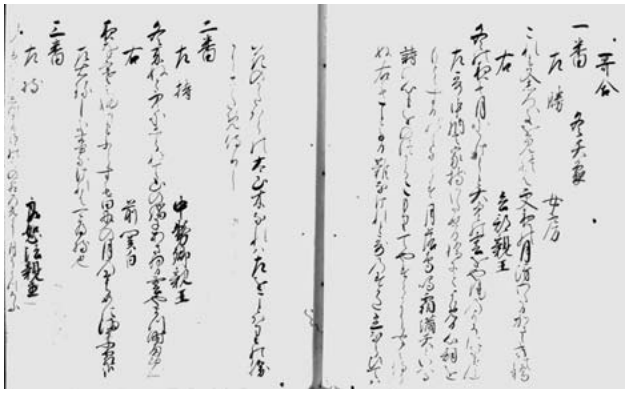
写本　半紙本１冊　（神宮皇学館文庫911.157-Ma）

万治二年（1659）五月から寛文二年（1662）四月まで、34回にわたって行われた和歌稽古会の記録。識語「宝暦九己卯年（1759）春二月中旬　藤原有親所蔵」。

③ 後水尾院御集

写本　大本１冊（神宮皇学館文庫911.158-G）

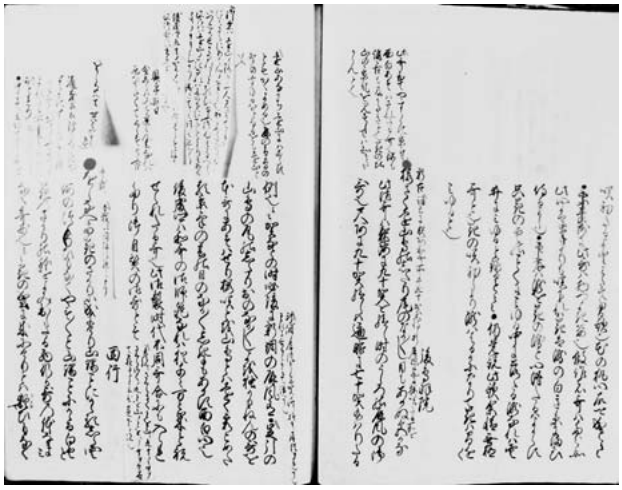
「仙洞御着到百首」「仙洞御製御当座」「聖廟御法楽」などを収める。寛永十五年（1638）、後水尾院は御鳥羽院四百年忌を催した。幕府と折り合いが悪く、和歌に没頭した点で両院は共通する。近世中期写。



④ 仙洞歌合

写本　大本１冊（神宮皇学館文庫911.18-Se）

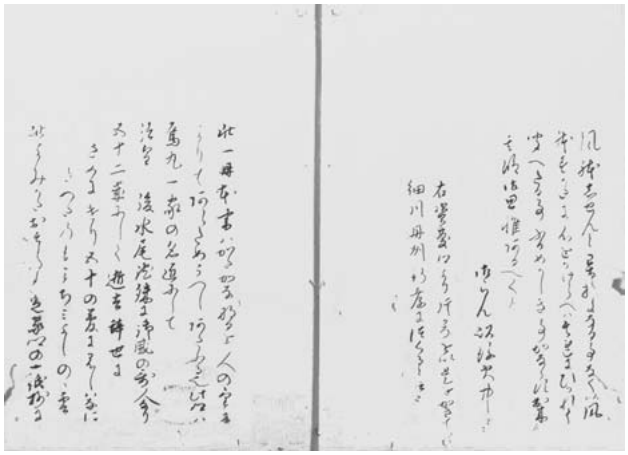
寛永十六年（1639）十月五日に行われた三十六番歌合。近衛信尋・良恕法親王・中院通村・飛鳥井雅章ら当代一流の歌人が参加。判者は三条西実条。一番右に「女房」とあるのは後水尾院のこと。近世前期写。



⑤ 詠歌大概勅講

写本　大本１冊（岡谷文庫911.104-H）

万治元年（1658）に行われた講釈。後水尾院は、ほかにも『伊勢物語』『百人一首』『源氏物語』などの主要な古典の講釈を行い、聞書も成立している。近世前期写。



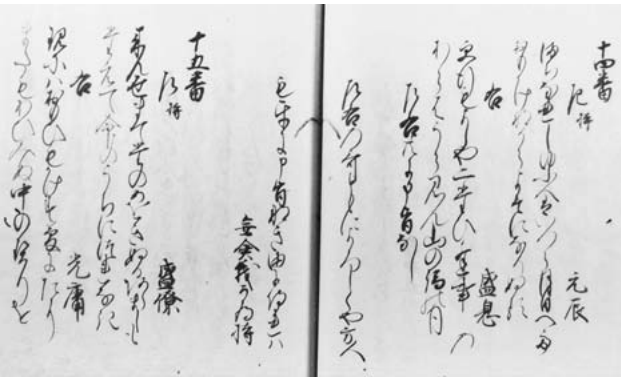
⑥ 和歌詠方

写本　大本１冊（神宮皇学館文庫911.107-Ka）

烏丸資慶の歌論書。資慶は幼年期に祖父光広から和歌を学び、寛文四年（1664）に後水尾院から古今伝授を受けた。近世中期写。

〈御師の文芸〉

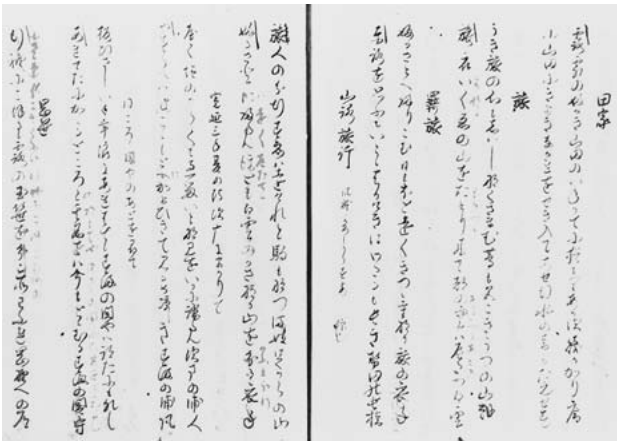
神宮皇学館文庫の多くを占めているのが、神宮御師の来田家の旧蔵資料である。その質量ともに充実した書物は、来田家の学芸への情熱と愛を物語る。伊勢の活発な文芸活動と、来田（藤原）有親（親岑）（宝永5年・1708～明和5年・1768）の歌まなびの様子を伝える資料を取り上げる。



⑦ 豊宮崎文庫歌合

写本　大本１冊（神宮皇学館文庫911.18-To）

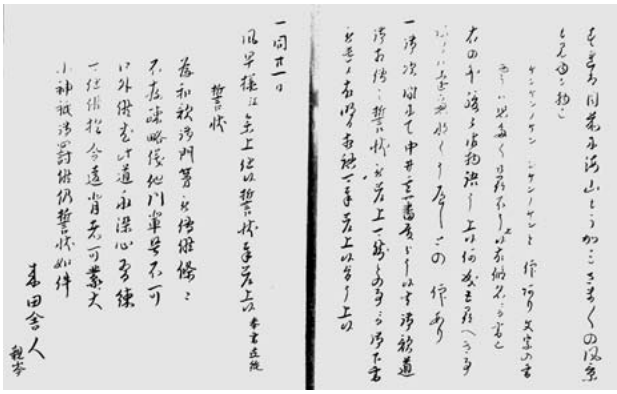
元禄八年（1695）八月十五日に行われた、荒木田盛尹・度会正珍ら伊勢の神官二十名による歌合。平間長雅判。近世中期写。



⑧ 風早前宰相実積卿江奉差上詠草控

写本　半紙本１冊（神宮皇学館文庫911.158-H）

有親が公家の風早実積に添削を乞うた和歌の控え。近世中期写。

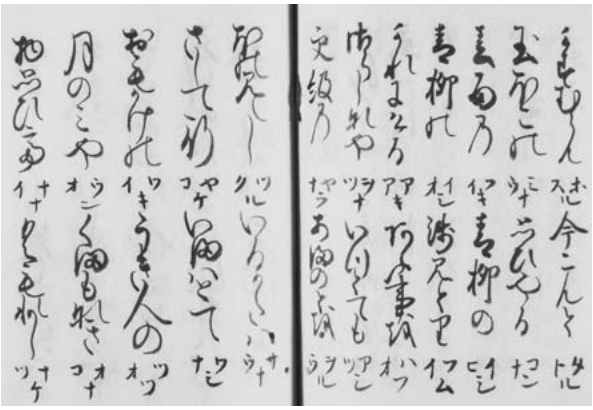


⑨ 風早家御教訓

写本　半紙本１冊（神宮皇学館文庫911.15-Ka）

延享三年（1746）六月に有親が速水房常を介して風早実積に入門した際の記録、寛延三年（1750）七月に風早家参上の際の和歌に関する聞書など。近世中期写。

（参考―王朝和歌の小さな世界）



三代集・新古今集五文字

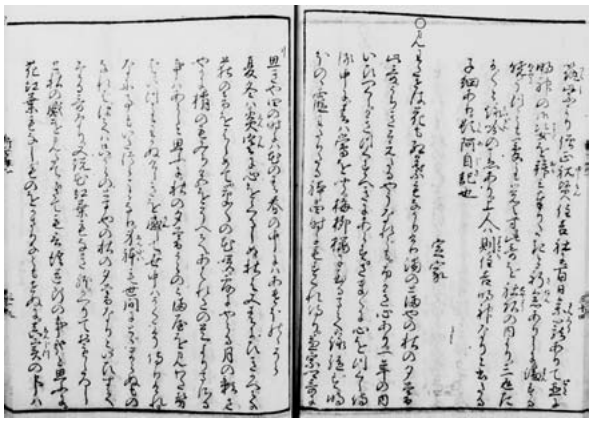
写本　特小本４冊（後藤文庫１）

三代集・新古今集の初句を記したもの。写真右上端「かすむらん　ホスル」は「かすむらん**ほ**どをも知らずしぐれつつ**す**ぎにし秋の紅葉をぞ見**る**」（新古今集・恋四・1246・徽子女王）、左下端「くもれかし　ナツケ」は「くもれかし**な**がむるからにかなしきは**つ**きにおぼゆる人のおもか**げ**」（同・1270・八条院高倉）という具合で、クイズの要素があったか。愛らしいミニ本を目で楽しみ、遊びながら和歌を覚えたのだろう。近世中期写。

３．和歌の注釈とその変遷 ― 和歌はどのように読まれてきたのか ―

〈定家の一首をめぐって〉

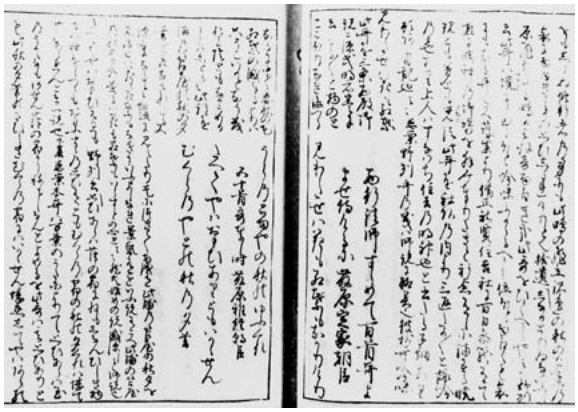
和歌を正確に理解するのは容易ではない。よく知られた和歌でも解釈の揺れているものは多い。一首一首に施された注釈は、時代の精神の反映でもある。ここでは、「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮れ」（新古今集・秋上・363・定家）の名歌がどのように理解されてきたのか見てみよう。大きく（A）花も紅葉も実在しない・(B)花も紅葉もいらない、問題ではない、の二説に分かれる。



① 新古今和歌集抄

刊本　大本４巻４冊（後藤文庫35）

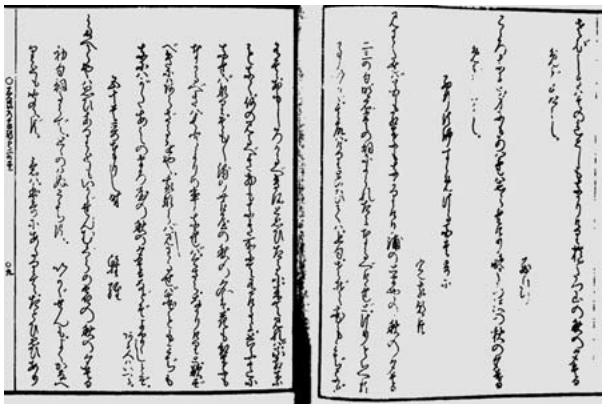
東常縁原著。細川幽斎増補。内題「新古今和歌集聞書」。『新古今集』の現存最古の注釈で、600余首の選釈。近世前期刊。（A）説により、仏教的無常観に結びつけた解釈。



② 八代集抄

刊本　半紙本108巻50冊（後藤文庫29）

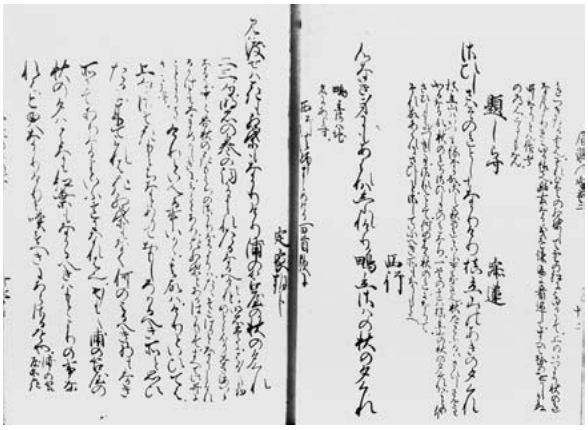
北村季吟著。八代集の全歌に注釈を施す。第40～50冊が『新古今集』。両説を併記しつつも（A）説を支持。師とは、松永貞徳のこと。



③ 美濃の家つと

刊本　大本５巻５冊　（後藤文庫10）

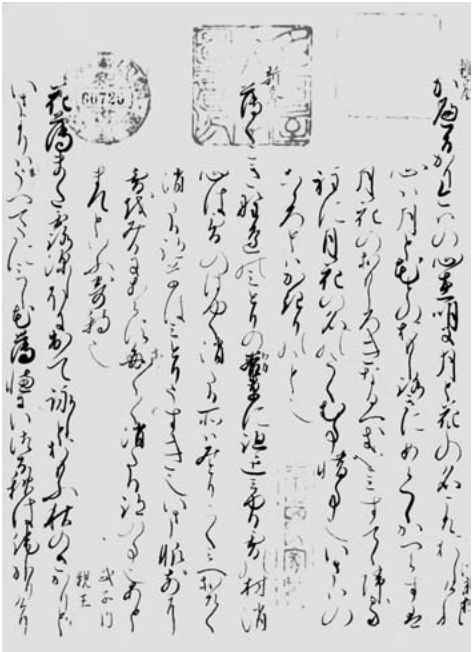
本居宣長の『新古今集』696首の選釈。天明七年（1787）から寛政三年（1791）に及ぶ講義録。美濃に帰郷する門人大矢重門に与えた。付された『折添』３巻３冊は、勅撰集中の新古今時代の歌358首の略注。古代への回帰を謳った宣長だが、最も愛好した歌集は『新古今集』であった。(A)説をとるが、歌への評価は低い。近世後期、永楽屋東四郎（名古屋玉屋町）刊。



④ 尾張廼家苞

刊本　大本５巻９冊（後藤文庫31）

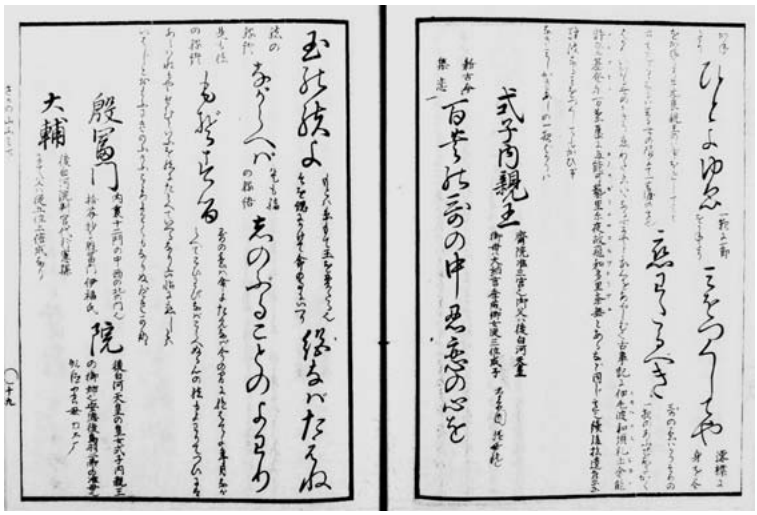
石原正明の『新古今集』注釈書。師宣長の説を批評し、増注する。尾張に帰郷する甥正俊に与えた。文政二年（1819）永楽屋東四郎（尾州名古屋本町通七丁目）刊。(B)説。



（参考①）宗長秘歌抄

写本　大本１冊（神宮皇学館文庫911.145-So）

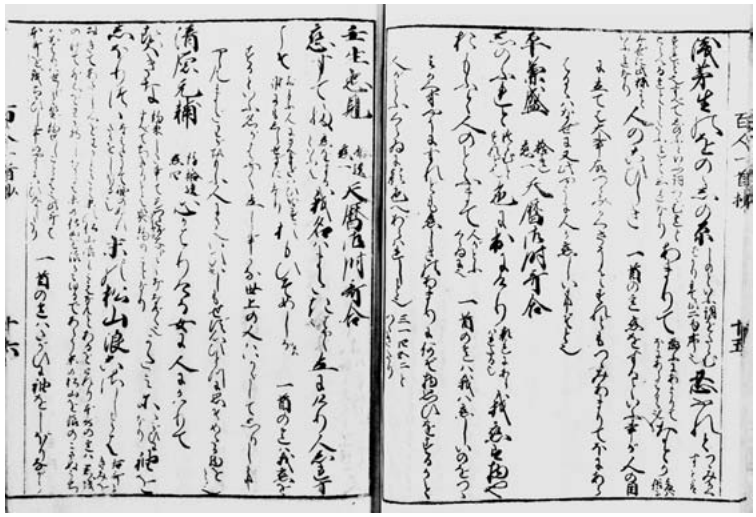
和歌139首の注釈で、うち88首が『新古今集』の歌。宗長の名を冠するが著者未詳。良経（摂政太政大臣。歌は新古今・春上・62）も宮内卿も早世の歌人。宮内卿の夭折は、歌を深く案じて詠んだためという（無名抄）。掲出の歌「薄くこき野辺のみどりの若草に跡迄みゆる雪の村消」（新古今・春上・76）は「若草の宮内卿」の異名を得た代表作。近世初期写。



（参考②）嵯峨の山踏

刊本　大本３巻３冊（後藤文庫12）

百人一首の注釈書。斎藤彦麻呂著。式子内親王は、後白河院の皇女。幼くして斎院となり、病気で退下、独身のまま後年出家。師の俊成は『古来風体抄』を献じた。『新古今集』には49首入集。家集『式子内親王集』がある。「不忍文庫」「阿波国文庫」の印記あり。文化十三年（1816）松屋要助（銀座町二丁目）刊。



（参考③）百人一首新抄

刊本　大本１冊（後藤文庫61）

石原正明著。『天徳内裏歌合』での、平兼盛と壬生忠見の屈指の名勝負。負けた忠見は、これを気に病んで悶死したという。天保五年（1834）正月、東都書林北嶋順四郎（神田鍛冶町）等五軒刊。

メ　モ

実行委員

伊藤　義人（委員長）　内藤　英雄　藪本　大明
逸村　　裕　北村　明久　蒲生　英博
秋山　晶則　臼井　克巳　大澤　　剛
塩村　　耕　郡司　　久
大井田晴彦　伊藤　哲谷

調査協力

加藤　弓枝
玉田　沙織

本文執筆

大井田晴彦

名古屋大学附属図書館特別展

和歌の書物

―新古今和歌集とその周辺―　図録ガイド

発　行　日　平成16年3月18日
編集・発行　名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室
〒464-8601　名古屋市千種区不老町
TEL : 052-789-3667　FAX : 052-789-3693
http://www.nul.nagoya-u.ac.jp
印刷・製本　（株）荒川印刷
©名古屋大学附属図書館